

北海道家庭学校寮長 藤田俊二年譜

河原国男

A Chronological Record of Syunji FUJITA's Life : A Teacher at the Reform School 'Hokkaido Home School'

Kunio KAWAHARA

はしがき

本稿は、北海道家庭学校寮長藤田俊二（1932- 、昭和7- ）の年譜をまとめたものである。

北海道家庭学校は、留岡幸助（1864-1934、元治元-昭和9）が、東京巢鴨に1899（明治32）年創設した「家庭学校」の分校として、1914（大正3）年北海道紋別郡上湧別村サナブチ（現、遠軽町）の原始のままの山林を切り開いた土地に開校された。現在、1998（平成10）年4月以降は児童自立支援施設に属す。数少ない民間の施設のひとつである。戦前の感化法（1900年公布）の下では感化院、戦後の児童福祉法の下では約半世紀（1998年3月まで）は教護院であった。創設以来「家庭学校」の名を校名としている点はかわらない。創設者留岡は『家庭学校』（1901、明治34）でいう、「不良少年収容所たるを知らしむるが如き名称、即ち感化院等の名を以てするは、教育の原則に反す。『家庭にして学校、学校にして家庭たるべき境遇に於て教育』することが根本的に重要であるとし、感化農場にこの校名を与えた（『留岡幸助著作集』第1巻、同朋舎、1978、p.502）。

藤田は、1963（昭和38）年から1993（平成5）年まで教護院・北海道家庭学校に在職し、その大半を石上館寮長として過ごした。その30年間に、藤田は膨大な日誌を残した。着任当初の17名を除く、145名の日誌が確認され、現存している。現在は、宮崎大学教育文化学部河原研究室で保管している。基本的にはすべて公的機関によって「措置」されて同校に入校し、石上館で、藤田寮長・寮母セツ子夫人と寝食を共にした少年たちについての日誌である。中学生が中心であるが、小学4年生から入所している事例もある。その年令は10-15、6才でさまざまであっても、十数名の寮生一人一人について、個別に用意された大学ノートに、毎日丁寧な字体で記述されている。少年たちの毎日の日記 - 寮長以外には読まれることは想定されていない、個人的な日記 - も、その日誌の該当箇所に抱かれるように織り込まれている。目に見える行動だけではうかがい知れない少年たち一人一人のその時々の内面が、その日記には書き記されている。そうした日記が添付されているので、日誌の一冊一冊に厚みがある。4、5 cmに

も及ぶものもある。藤田の日記 - 公認された業務日記ではないが、公的責務感に根ざして第三者にも説明的である部分を含む、そのような藤田の日記 - は、めぐる季節のなかで作業して共に汗を流し、その時々で励まし、叱責し、そのようにして成長をうながし、一步一步その姿を見届ける寮長藤田と少年たちとの対話の記録、その蓄積としてわれわれのもとにある。

その日記のほんの一部（仮名3名についての日記の抄録）は、すでに『もうひとつの少年期』として1979（昭和54）年晩聲社から出版されている。膨大なその日記そのものは - 個人情報に十分に配慮しつつ - 共有財産として整理され、研究目的で閲覧に供する体制を整備することも必要であろう。また、旧著は1960年代の初期の日記であったが、70年代、80年代も含め全容に近い姿で公表されることが期待される。その公表のための作業は、現在進行中である。

こうした努力とともに、その日記の全体が示す、藤田の実践とその思想を、さまざま研究的アプローチをもって解明することが重要であると、私は考える。藤田が少年の日常を「もうひとつの少年期」を示すものとして毎日記録にとどめようとした意志とその足跡の質・量の全体に、以後における研究上の取り組みが十分に比類できるとは思われない。しかし、可能なかぎり藤田の生涯にわたるその仕事の全体を研究史上に記録にとどめ、その特質と貢献を明らかにすること、この研究目的を引き受け遂行することは、後世に残された者の歴史的責務であると私は考える。「教護院」の名が消えたとしても、あるいは、この北海道家庭学校でも他の施設と同様に、藤田在職時と較べて、生徒数が半減して定員と現員の乖離が生じ、児童自立支援施設そのものの「将来像」や「存在意義」が問われる状況があったとしても、この歴史的責務の意義は変わらないであろう。本研究はそのような認識に基づき教育学研究の立場から、日記を手がかりとして、北海道家庭学校寮長としての藤田俊二の教育実践とその教育思想の特質を究明することをめざす。

本研究を含め、藤田を研究の対象にするという場合、北海道家庭学校史という直近の文脈のみならず、義務教育学校史、生活綴方教育史、戦後教育史、ライフコース研究など種々の文脈で、あるいは、プロテスタント系教育福祉実践史などいっそう普遍的な視野で検討することも可能であろう。本稿は、それらのアプローチの基礎作業として、生涯にかかわる年譜を現時点で作成するものである。

作成上の留意事項

1. 藤田の生涯に関する基本的な事実確定に際しては、藤田自身による「履歴書」（平成21年4月28日現在）を参照した。これには、氏名、現住所、本籍、学歴、各種委員など公職歴、表彰歴が、A4 1枚にまとめられている。詳細は、藤田の著作『もうひとつの少年期』（晩聲社、1979）、同『まして人生が旅ならば - 北海道家庭学校卒業生を訪ねて -』（教育史料出版会、2001）を利用した。前者は「少年期」、後者は「まして」と略記した。これらの著書とともに、藤田自身の書簡の一部を用いることができた。その一部とは、藤田の20代からの親友長田良三氏宛てのもので、長田氏本人から書簡を提供していただいた。藤田が北海道家庭学校に就職する前後の心境を生き生きと伝える。これについては、できるだけ原文をそのまま紹介するようにした。退職後の動静近況等については、河原宛の書簡を活用した。
2. 現時点でも年月などの履歴上の基本的事実について確認が不十分なところがある。それについては*を記した。とくに、『山びこ学校』の編者無着成恭からの葉書を受け取った1952年

- の事実内容の確認、家庭学校校長留岡清男からの1963年の採用通知の文書内容の確認について。
3. 家庭学校在職中、公的な外出事項のうち、生徒との研修旅行については、本年譜の記載から除外した。予後指導、在校生宅訪問、専門委員会出席などの記録については、別稿を用意する。
 4. 在職中、藤田が個人別に毎日記した日誌の記録状況についても、本年譜の記載から除外した。個人情報に注意して、基本情報に関する別稿を用意する。
 5. 主として在職中に執筆した北海道家庭学校機関誌『ひとむれ』や民間雑誌への寄稿論文・報告等のリストについても、本年譜では一部ふれるが、基本的には除外した。別稿を用意する。
 6. 家庭学校の児童生徒の氏名については、氏もしくは氏名が表記されている場合でも、名のみ記した。
 7. 1)「略年譜」と、2)詳細な内容を記した本編の「年譜」とを区別して記述した。
 8. 本編の「年譜」には、前史的事項として、北海道家庭学校の創始者留岡幸助(1864-1934、元治元-昭和9)及び第4代校長留岡清男(1898-1977、明治31-昭和52)について必要最小限ふれた。なお、留岡清男とともに、藤田在職時の第5代校長谷昌恒(1922-1999/2000、大正11-平成11/12)がどのような役割をはたしたかは、藤田の仕事を明確に位置づけるためにも、きわめて重要な検討課題であるが、本年譜の記載からは除外した。別稿を用意する必要がある。
 9. 祖父藤田市五郎にかかわる事跡や、それについての藤田俊二自身の所感、動静については、本編の「年譜」ではやや詳細にふれた。公的な場では発言の対象にはなりがたいが、祖父の存在は、留岡幸助、清男らとともに、俊二の思想形成にとって重要な意味があるので、藤田の晩年の時期を含め、必要な情報を記載した。
 10. 藤田自身の最晩年については、あらためて年譜的事実について確認する必要がある。また、本年譜では上記に断つたように関連事項(日誌の作成実態、予後指導等の事実、論説・報告等の発表事実、など)は除外したが、そのことと関連して、本年譜の記載の内容は、藤田に対する精神的記述を重んずる結果になった。
 11. 事実確認と個人情報保護に関して付記する。本稿作成時点で、藤田俊二本人はセツ子夫人とともにご健在で、郷里北斗市千代田で畑仕事と読書生活をされている。氏には、本年譜原稿を見ていただき、記載の事実内容の確認を経て(2012年3月末から4月初め)、返送された原稿に筆者(河原)の責任において一部の削除と必要な修正を施した。その際、書簡等の引用文中で個人が特定され、人権保護の観点から懸念される箇所については***を付した。ただし、ごく一部であるが、書簡等の引用文で誤解等を生じかねない表現の箇所について、歴史的資料であることを優先し、原文のまま表記したところがある。この箇所については、本稿が研究論文である旨を藤田俊二自身に説明し、了解を得た。

1. 略年譜

1932(昭和7)

8月29日、藤田俊二、北海道大野町(現在、北斗市)千代田106番地の1に父敏三(1904-1967、明治37-昭和42)、母ミツエ(1909-2008、明治42-平成20)の次男として生まれる。

1938 (昭和13) 6才

4月、大野村立島川小学校入学。

1943 (昭和18) 11才

祖父藤田市五郎 (1865-1943、慶應元-昭和18) 死去。

1944 (昭和19) 12才

3月、大野村立島川小学校卒業。

4月、大野村立島川高等科入学。

1946 (昭和21) 14才

2月、第一次農地改革実施。

3月、大野村立島川高等科卒業。

「百姓になる」ことを決心する。大野町千代田の佐藤乙吉から「百姓の根本」をたたきこまれる (「まして」 p.290)。

1947 (昭和22) 15才

日本共産党に入党するが、3ヶ月程度で離脱する。

1948 (昭和23) 16才

4月、北海道立大野農業高校 (定時制) 入学。

1949 (昭和24)

留岡清男 (1898-1977、明治31-昭和52)、第4代校長となる。

1950 (昭和25) 18才

3月、北海道立大野農業高校 (定時制)、中退。

1951 (昭和26) 19才

- ・読書サークル「若竹文庫」で同年刊行の無着成恭編『山びこ学校』を取りあげる。
- ・そのころ大野町から函館の元町港が丘教会に3時間かけて通う。千代田で読書サークルを組織し、椎名麟三の作品から渋谷区の代々木上原教会牧師赤岩栄 (1903-1961、明治36-昭和41)『キリスト教と共産主義-私の歩んできた道-』三一書房、1949、を知る。先生から「社会変革への烈しい願望と解していいイエス像」にふれる (「もうひとつ」 p.274)。
- ・その年、上原教会に通うために上京し、代々木上原駅前の「ドイツル」で働く。その夏赤岩栄をたずねる。赤岩とともに、ドイツル店主から北海道に帰ることを勧められる。上京2ヶ月で帰郷。

1952 (昭和27) 20才

「生活を記録すること、未来をしっかりと見つめることです」という無着成恭からのハガキ

(3月9日付け)を受け取る(「もうひとつ」p.265)。

また、この頃、無着からの「日本の農村は君たち若者によって変革されて行かねばなりません。希望を実現して行くのは、君たちです。佐藤藤三郎や横戸喜平治と文通してください」というハガキ(*年*月)に「元気づけられ」た(「まして」p.283)。

1953(昭和28)21才

大野町青少年4Hクラブ連合協議会第4代会長(1955年まで)。

そのころ大野町教育委員会職員長田良三(1934-、昭和9-)と社会教育活動を通じて知り合う。生涯の親友となる。

5月31日、赤岩栄より自著『イエス伝』(日曜書房、1950)を贈られる。署名記録あり。

1956(昭和31)24才

大野町社会教育委員(1960年まで)。

1957(昭和32)25才

セツ子(大野町千代田114、昭和13年2月18日生まれ。父清太郎、母ミワの長女。父は33才で死去)と結婚。

1958(昭和33)26才

日産化学工業(函館市北浜町)で稼働する。2ヶ月。

1959(昭和34)27才

長男剛太郎生まれる。

1960(昭和35)28才

アメリカ領事館札幌支部で短期アメリカ移民事業に応募し、二次で不合格(妻子を同伴しないという本人の意向は受け入れられなかったと、藤田はふり返る)。

1961(昭和36)29才

1月26日、佐藤藤三郎(『山びこ学校』の卒業生代表)と山形上山温泉で過ごす。日本政治のこれからのこと、無着成恭のこと、「家を、村を出る」ことなどについて語り合う。この年、村を出ることを決心する。

3月次男節男生まれる。

7月19日、歌志内市の炭坑の一つ住友石炭鉱業株式会社「住友歌志内炭坑」に入社する。短期契約坑員として始める。1962年11月まで。同炭坑は、1971(昭和46)年に閉山。その間、『現代史資料(1) ゾルゲ事件(1)』みすず書房、1962、1800円、『現代史資料(2) ゾルゲ事件(2)』みすず書房、1962、1800円、などを定期購読する。

友人長田良三に宛てた書簡のなかで、「自分を肥らせたい—精神的に」(推定1961年7月)、『人間の本当の生きる意味』だけは見失いたくない。(1961年9月14日)「少く共僕等だけは『自分だけの何か』を生涯に創りたい。...ひっそりと地味に生活しています。今は自己充電の

時期だと思っています。」(1961年10月3日)と語る。

1962 (昭和37) 30才

8月、歌志内炭砒労働組合の「歌労報」第94号(8月10日)に「青春について」発表。図1。

「何も『長』のつく偉い人になろうとか、有名になろうとかいう野心ではなく、少く共、毎日のくり返しの仕事の中で『未来を持つ精神の生活』だけはしたいという事だ」と記す。

11月、住友歌志内炭坑を退社する。

12月、倶知安町遠藤機械店にクボタ農業機械の販売員として働く(4ヶ月)。図2

1963 (昭和38) 31才

3月18日、風邪をひいたその日、朝日新聞の連載記事「新人国記-北海道篇-」に「留岡幸助と北海道家庭学校」(入江徳朗)が掲載される。その記事にふれ、同校で働くことへの希望を募らせる(「まして」p.241)。

*月に、校長(第4代)留岡清男(1898-1977、明治31-昭和52)に長文の手紙を書く。投函して3日後に、清男から「速達」(未確認)が届き、「思わず涙が出た」(「もうひとつ」p.268)。

5月、遠藤機械店を退職。

6月、北海道家庭学校に採用される。

7月、向陽寮長(~1964.3)。図3.4.

「僕も少しづつ家庭学校の生活に慣れて来ました。僕も17人の先生方と同じく『藤田先生』なんて呼ばれて今でもちょっとてれくさいですが、...とにかく僕の生きる場所としてこれ程最適の場所はないと感謝している次第」(長田良三宛、1963.9.24消印)。

1964 (昭和39)、32才

2月、長田良三に宛て書簡を送る。

「僕も家庭学校で何となくみとめられて、12月から一つの寮舎を任せられ寮長として6人の生徒の責任を持つようになりました。...一人一人のカルテ(非行歴、家庭歴、児童相談所での記録等)を見ると涙がでます。...その古い先生達の唯一の生きがいと喜びは卒業生が訪ねてくる時です。...今更、千代田に帰る気はありません。...僕はここで漸やく一つの道を歩み始めています。キザな言葉になりますが、家庭学校でこの仕事をやるために今迄の青春があったとさ思います」(原稿用紙3枚、長田良三宛、1964.4.17消印)

4月、洗心寮(6名)の寮長となる(~1965.3)。

4月、札幌南高等学校(通信制)入学(有朋高等学校に校名変更)。

9月、留岡清男『教育農場五十年』岩波書店、刊。

1965 (昭和40) 33才

4月、石上館の寮長になる(~1993)。

日誌を書き始める。書き方について、武蔵野学院井上肇『山鳩のうた-教護院の少年たち-』白鳳書院、1950、とともに、斯道学園の西野勝久の「汐風とてんぐ岩」(『教護』第136号、1965)に示唆を受ける。『山鳩のうた』は、家庭学校の最古参事崎好に紹介される。著者井上は、元北海道家庭学校寮長寺崎好の長女の主人。一人一人個別に記す本書のかきぶりと、「と

にかくにも、それはその時、その時における、私と子どもたちとのかけ換えのない真実なので、もはや私にはどうすることもできないからです」という西野の言葉は、藤田の指針となる。

1966 (昭和41)、34才

2月16日、寮生にソロバンを教える。以後、日課になる。

3月、有明高等学校卒業。

1967 (昭和42) 35才

1月、父藤田敏三死去。

7月、留岡幸助の時代から奉職し、つねに藤田を励まし続けてくれた寺崎好の「強い示唆」を得て、「公的な記録」を書き始める（「まして」p.292）。寺崎好は、留岡清男『教育農場五十年』では、「いったん引受けた仕事に対する仮借なき厳しさ」（p.133）があったと評された。

1968 (昭和43) 36才

この年、日誌を留岡清男校長にみてもらう。新校長が来られる前に、「自分を採用してくれたのは留岡清男先生だ、新しい校長が来る前にこの記録を読んで頂いて御意見を頂こう」（河原宛、2009.4.10宮崎消印）と思い、数センチ分のノートに記した日誌を校長に見せる。「あなたの記録は実にいい」と励まされる。「涙の出るほど嬉しいことだった」（「もうひとつ」p.270）。図5。

1969 (昭和44) 37才

4月、谷昌恒(1922-2000、大正11-平成12)が第5代校長として就任。

1972 (昭和47) 40才

7月10日、寮文集『輪』を創刊（発行人藤田）する。が、記事を掲載された保護者の父親からプライバシーの問題だととられる。以後は続刊せず。

1973 (昭和48) 41才

札幌南高校通信教育部卒業。「高校を卒業するのに25年かかったことを恥ずかしいとは思わないが、やっぱり辛いことだったと思う」（「もうひとつ」p.270）

1976年 (昭和51) 44才

9月1日、「日誌抄-Kのこと-」（『ひとむれ 教育特集号』通巻411号）を掲載する。

1977 (昭和52) 45才

2月3日、留岡清男(1989-1977、明治31-昭和52)、闘病生活の末死去。

作家高井有一より取材を受ける。高井「ひとむれの野辺」が『世界』第382号、9月に掲載される。前年の「日誌抄-Kのこと-」や、すでに膨大な量に蓄積された日誌についてふれられる。「『朝でも夜でも、時間を見つけてはこれらを書いていますが大変だとは思いませんよ。大変だと思ったら出来ませんね』と藤田氏は笑って言った」と記されている。

1979 (昭和54) 47才

取材を受けて刊行された斉藤茂男のルポルタージュ『父よ！母よ！』上、太郎次郎社、1979、のなかの「白い森の学校」の章で、藤田の取り組みも紹介される。家庭学校着任までの藤田の足跡をたどる（同書、pp.133-135）とともに、日誌も写真で一部分も紹介される。「少年の背負っている荷を、少年とまったく同じ重さで感じてやろう-寮長たちは、そう思っているにちがいない」（p.65）とある。比較的良心的に記述された問題提起的なルポで当時反響があったが、取材対象側からすれば、距離感のある記述に「隔靴搔痒を感じ、自分も書かないではいらなかった」と後に藤田はふり返る。その年の7月、「日誌抄」の記述内容を含む『もうひとつの少年期』が刊行。本書を原作として1984年に映画「もうひとつの少年期」が製作される。

1983 (昭和58) 51才

11月16日、全国教護院教護研修会で「寮長二十年のくぎりに」を発表。

1989 (平成1) 57才

すでに退職した寺崎好（札幌市）より、「カルテ約40冊」が届けられたことを伝える来信（2月5日付け）。「この記録は日本一のものでしょうかと今も尚思っています。有がとうございます。貴重なものです。86才になってこう云うものを読めるなんて生命冥加です」と記されている。

1990 (平成2) 58才

3月17日、石上館寮長職を捧 一に委ねる。以後は、楽山寮の寮長兼教務部長にあたる。

1992 (平成4) 60才

11月、寺崎好死去。

1993 (平成5) 61才

3月、北海道家庭学校を60歳定年で退職する。
大野町（現在北斗市）千代田の郷里に帰る。

1994 (平成6) 62才

春、長年にわたる児童福祉功労・教護功労で、叙勲、勲六等瑞宝章を授与される。
10月、大野町教育委員に任命される。

1996 (平成8) 64才

11月、立正大学経済学部で講演

1997 (平成9) 65才

11月、横浜知的障害関連施設協議会で講演。

1998 (平成10) 66才

11月、卒業生を訪ねる。

1999年（平成11）67才

4月、新大野町史編纂準備委員会委員長（2000年3月まで）

10月、北海道里親連合会（洞爺温泉ホテル）で講演。

2000（平成12）68才

1月、卒業生を訪ねる。

10月、大野町教育委員会教育委員長（2004年10月まで）。

12月、宮崎大学教育文化学部で講演。

2001（平成13）69才

12月、『まして人生が旅ならば-北海道家庭学校卒業生を訪ねて-』教育史料出版会より刊行。

2002（平成14）70才

1月、大阪府立大学社会福祉学部で講演。

11月、高知県立高知学園で講演。

11月、文京学院大学で講演。

2003（平成15）71才

5月、大野町高齢者大学で講演。

2005（平成17）73才

8月、上磯町民協第2ブロック講演会

10月、青少年自立援助ホーム「ふくろうの家」を運営する「青少年の自立を支える道南の会」の立ち上げにかかわり、初代代表となる。同ホーム、同月開設（函館市）。

11月、ルーテル市ヶ谷センターで開催された厚生労働省・東京都・全国児童自立支援施設協議会「児童自立支援事業105周年記念大会」で記念講演を行う。

2006（平成18）74才

1月、東京都立誠明学園で講演。

2月、北斗市総合文化センター「かなでーる」で講演。

2月、北斗市誕生とともに、大野町教育委員会委員を辞す。

6月、「道南の会」NPO法人設立にむけた設立総会開催、会長に選出される。

7月、北斗市大野の自宅2階に保管した在職中日誌全部（図6）を宮崎大学教育文化学部の河原に託し、送付する。

2007（平成19）75才

1月、「道南の会」はNPO法人として認可。同時に理事長に就任する。

2008 (平成20) 76才

4月、「道南の会」の名誉会長となる(現在に至る)。

6月、児童家庭支援センター(千葉)で講演。

10月、母藤田ミツエが100才で死去。

2009 (平成21) 77才

5月、「79年の歳月を経て風雪に耐えるも老朽化」(「趣意書」)した祖父藤田市五郎の頌徳碑(「藤田翁称徳碑」の碑銘)を補修するという目的から千代田地区で寄付金募集が始まり、近親者として区内の住民に協力を求める立場になる。

この月の末、『森崎和江コレクション -精神史の旅-』全5巻(藤原書店)を読み始め、10月には読了する。

2010 (平成22) 78才

7月～、函館少年刑務所にて私的な個別面接を務める(2011年11月まで)。図7.

2. 年譜

1864 (元治元)

留岡幸助(1864-1934、元治元-昭和9)生まれる。

1885 (明治18)

幸助、同志社英学校神学科入学。新島襄の教えを受ける。

1984 (明治27)

幸助、監獄学の研究視察のためアメリカへ遊学、翌28年5月、エルマイラ感化監獄でブロックウェー(Zebulon Brockway, 1827-1920)と面会する(『留岡幸助日記』第1巻、矯正協会、1979、p.484)。明治45年、恵与されたその自伝(Fifty Years of Prison Service, 1912)から“*This one thing I do*”の指針を学ぶ。これを幸助は邦語に翻訳して、「**一路到白頭**」と表現し、座右銘とする。

1897 (明治30)

幸助「人生は試練なり」(『基督教新聞』735号)を発表する。「人類を成玉せんには刺激物なくんばある可らず、この刺激物を名けて試練とは云ふなり、...風なくして帆前船は馳らざるべし、...航海に必要なは風なり、...風は呪咀にあらずし賜なり、教育に必要なは試験なり、然れども試験の為に落第するものあるを以て試験は呪咀なりと云ふを得可べきか、」「使途パウロにこの修養備はりたるを以て彼揚言して曰く『**艱難にも尚ほ歡喜を為す**』と、...」(『留岡幸助著作集』第1巻、同朋舎、1978、pp.252-253)。

1898 (明治31)

幸助の4男として留岡清男(1989-1977、明治31-昭和52)生まれる。

1899 (明治32)

幸助、東京府巢鴨村に「家庭学校」を創立。

1914 (大正3)

北海道上湧別村社名淵に同校の分校「家庭学校農場」を開設。

幸助「感化事業の真諦」(『人道』116号)で、目下入所する4名のうち、日の浅い1名を除く、「3人は3、4月間寝食を共にしたので、先づ大体個性を研究することが出来た」として、その1名についてふれる。「固より農業をさせても碌な農業が出来る筈がない。然るに不思議なことに、此の手に余る少年に持って生まれたとでも云うべき一つの長技がある。それは馬車を御することである。…此の点に於いては、サナブチ農場第一等の人物である。今一人は…。自分は彼等と寝食を共にし、此等の事実を目撃して、今更らの如く自分が不良少年感化の事業に従事したことを感謝せざるを得なかった。感化事業は決して廃物の利用ではない。若し利用すべしとするなら、即ち彼等の長技を利用して之を善良な方面に導く点にのみ存するのであるが、佐りとて不良少年は決して廃物ではない。若し強いて云ふべくんば、彼等は寧ろ放棄物である。…人には夫々個性があって、それに必ず引き掛りといふものがある。此の引っ掛りをさへ発見することが出来たならば、よし其の人が墮落の深淵に沈んで居ても必ず之を引き上げることが出来る」(『著作集』第3巻、1979、pp.330-331)。幸助のこの論説を、藤田は後、1983(昭和58)年全国教護院教護研修会資料「寮長二十年のくぎり」全18ページ、でふれる。「この真諦は、60年たった今も凛として私共の指針となっています」と藤田は記す。

1915 (大正4)

幸助「如何にしたら善人になれるか」(『人道』119号)で「難儀をすること」を取り上げる。「知識は書籍から得ることが出来るが、性格は艱難から鍛え上げられねばならぬ。…凡ゆる艱難の間に身を処して居る中に、人の情けも世の味も分り、斯くて性格が内に玉成する。」(『著作集』第3巻、p.346)

1932 (昭和7)

8月29日、藤田俊二、北海道大野町(現在、北斗市)千代田106番地の1に父敏三、母ミツエの次男として生まれる。

父藤田敏三(1904-1967、明治37-昭和42)は大野町役場に勤務し、収入役(昭和7-昭和10)を務めた。戦後は、病弱でとくに仕事はせず、小説を書いていた。母ミツエ(1909-2008、明治42-平成20)は、小学校の教員をしていた。大野農協婦人部長を20数年、道南連合会会長を務める。作家伊藤整夫人とは函館高等女学校時代の同級生で親交があった。長男(俊二の兄)藤田俊太郎も、教員をしていた。

祖父(敏三の父)藤田市五郎(1865-1943、慶應元-昭和18)は大野町で指折りの大地主(明治39年時点での調査(『大野町史』1970、pp.224-225)では水田、22,372町歩、畑5,152町歩)であるとともに、大排水溝掘削、土地改良、西洋野菜栽培、稲作振興等の功労者であった。種々表彰され、存命中「にもかかわらず」(藤田俊二)、昭和4年に「藤田翁称徳碑」の碑銘で石碑が千代田に建立された。昭和16年には藍綬褒章を受けた。日記等は、北海道立文書館に「藤田家文書」として保存されている。(詳細履歴は『大野町史』pp.346-348)

両親については、「生まれ故郷の近くの部落の小学校教師となり、その部落の大地主の二番目の息子の文学青年と猛烈な恋愛の末結婚した」と記している（藤田俊二「青春について」『歌労報』第94号、1962）。また、友人に対しては、「地主で名家で育った生活無能力な父と勝気で才能があってヒステリックな位に神経の鋭い母」とも記す（長田良三宛書簡、1963. 4）。その父は、祖父市五郎の二男。

俊二の兄俊太郎は、父および祖父市五郎によって「一族あげて」大切にされていた。「3年生の時に既に6年生までの全教科を暗記していたという伝説がある程に勉強のできたすぐれた存在でした」と藤田は記している（河原宛書簡、2009. 6. 13）。しかし、大地主消滅で旧制函館中学から大学に進学はかなわず、代用教員から僻地の小学校長となった（河原宛書簡、2009. 5. 27受け）。

1934（昭和9）

留岡幸助（1864-1934、元治元-昭和9）死去。70才。

1937（昭和12）

留岡清男「酪聯と酪農義塾-北海道教育巡礼記-」（『教育』第5巻第10号）を発表。「生活主義の教育を標榜し、これを綴方によって果させようとしている」北海道綴方教育連盟の座談会に出席した。「児童に実際生活の記録を書かせ、偽らざる生活を綴らせる、すると、なかなか良い作品が出来る、之を読んでできかせると、生徒同志が又感銘をうける、といふのである。そしてそれだけなのである。...このやうな生活主義の綴方教育は、畢竟、綴方教師の鑑賞に始まって感傷に終わるに過ぎないという以外に、最早何も言ふべきことはないのである」（p.60）。藤田が、清男のこの問題提起的な有名な所見をどう受けとめたかについては、1968年の記載参照。

1938（昭和13）6才

4月、藤田俊二、大野村立島川小学校入学。そのときの担任は母藤田ミツエだった。

1943（昭和18）11才

祖父藤田市五郎（1865-1943、慶應元-昭和18）死去。

祖父に感謝する一方、「地主だった負い目を感じる様になったのは、小学生時代に遊びに呆けたほとんどの家が貧乏な小作人の家の子供が多かったことを戦後の様々な活動の中で思い起こして行つたからだと思います」（河原宛書簡、2009. 6. 13）。

初孫に当たる祖父の兄俊太郎に対する「溺愛」の「陰で二男坊で本当に鼻たれ坊主だった僕は勉強しても中ぐらい、学校が終われば村中の同級生や友だちの家を遊び歩いて、ずうっと祖父から一番遠い場所で大きくなっていた」（河原宛書簡、2009. 6. 13受け）。

祖父没後であっても、その存在は生涯にわたり俊二にとって大きな意味があった。祖父藤田市五郎「から逃れようと生きて来た部分が僕にはあり、それは今現在もあり...個人としては尊敬していても大地主として大野に君臨していた『存在』そのものへの嫌悪感は、昭和22年頃からそれは今も消えていません」と語っている（河原宛書簡、2009. 5. 27受け）。

1944 (昭和19) 12才

3月、大野村立島川小学校卒業。

4月、大野村立島川高等科入学。

1946 (昭和21) 14才

3月、同上、卒業。

「百姓になる」ことを決心する。大野町千代田の佐藤乙吉に「百姓の根本から」農業をたたきこまれる。「69歳になった今も、田植え、稲刈り、草刈り、草取り、長芋掘り、ゴボウ掘り、鋤使いに絶対の自信を持っているは、ただただ怖かった佐藤乙吉さんのおかげ」（「まして」p.290）とふり返る

1947 (昭和22) 15才

日本共産党入党するが、3ヶ月程度で離脱した。「火炎瓶闘争」にかかわった。

1948 (昭和23) 16才

4月、北海道立大野農業高校（定時制）入学。

1949 (昭和24)

留岡清男、第4代校長となる。

1950 (昭和25) 18才

3月、北海道立大野農業高校（定時制）、中退。

4月、井上肇『山鳩のうた -教護院の少年たち-』白鳳書院、初版刊行。

10月、波多野勤子『少年期 -母と子の4年間の記録-』光文社、初版刊行。「お母さま。僕がみなといっしょに諏訪へ行くか、それとも僕だけ東京へ残るかということ、お母さまは僕のいいようにきめていいっておっしゃいましたね。それで僕はこのあいだから考えていたんですが。僕はやっぱり一人東京に残りたいと思います。...せつかく東京でも1, 2とっていい中学校に入学できたのに、すぐに田舎の学校にいくなんでどう考えても悲惨です」と書き出しにある。1979 (昭和54) 刊行の『もうひとつの少年期』で藤田は本書についてふれ、「なにかにもが不如意な生活の中で不思議に明るく伸び続けている少年たちの感性こそ、真に『少年期』と呼ぶにふさわしいと、敢えてこの本の題名としました」と記す。

1951 (昭和26) 19才

・「大沼かん排事業」推進に賛成する立場から、『北海道新聞』（*月*日）に「日本共産党に問う」発表。その年、同紙上で、論戦。

・読書サークル「若竹文庫」で同年刊行の無着成恭編『山びこ学校』を取りあげる。同書に対して「烈しく傾倒し『百姓はペンを持たねばならぬ』という運動の中で『俺たちは書かなければいけない』という青年運動を自分の村に広げて行」った。（河原宛書簡、2009. 4. 10宮崎消印）。

・そのころ大野町から函館の元町港が丘教会に3時間かけて通う。千代田で読書サークルを組

織し、椎名麟三の作品から、椎名が洗礼を受けた代々木上原教会（渋谷区）牧師赤岩栄（1903-1961、明治36-昭和41）『キリスト教と共産主義～私の歩んできた道～』三一書房、1949、を知る。先生から「社会変革への烈しい願望と解していいイエス像」にふれる（「もうひとつ」p.274）。

・その年、上原教会に通うために上京し、代々木上原前の「ドイツ」で働く。夏、赤岩栄先生をたずねる。先生とドイツ店主から北海道に帰るように勧められる。上京2ヶ月帰郷。「赤岩栄先生の弟子のつもりでいた数年間」（同上、p.274）だったと、記す。

1952（昭和27）20才

・「生活を記録すること、未来をしっかりと見つめることです」という無着成恭からのハガキ（3月9日付け）を受け取る（「もうひとつ」p.265）。

・また、この頃、無着からの「日本の農村は君たち若者によって変革されて行かねばなりません。希望を実現して行くのは、君たちです。佐藤藤三郎や横戸喜平治と文通してください」というハガキ（*年*月）に「元気づけられ」た（「まして」p.283）。「佐藤藤三郎さんとの友情の中で僕はなんとか『百姓』であり続けていた。しかし、1961年7月、炎暑の夏に僕はあっさり『百姓』をやめた」（藤田俊二『山びこ学校』のこゝろ『非行問題』第199号、1993）

・「昭和26、7年だったか、僕は日本共産党函館地区委員の古い友人たちから、『藤田俊二はプチ・ブルの残滓で生きている』と徹底的に批判された時に僕は必死で反撃しましたが、的を射ている部分があったから僕は大野を脱出して歌志内へ向かったという思いがたしかに今もあります」（河原宛書簡、2009.5.27受け）

1953（昭和28）21才

大野町青少年4Hクラブ連合協議会第4代会長（1955年まで）。

そのころ、大野町教育委員会職員長田良三（1934-、昭和9-）と社会教育活動を通じて知り合う。生涯の親友となる。

5月31日、赤岩栄より自著『イエス伝』（日曜書房、1950）を贈られる。同書に同日の署名日が筆記。

1956（昭和31）24才

大野町社会教育委員（1960年まで）。

1957（昭和32）25才

節子（大野町千代田114、昭和13年2月18日生まれ。父清太郎、母ミワの長女。父は33才で死去）と結婚。

1958（昭和33）26才

日産化学工業（函館市北浜町）で稼働する（2ヶ月）。

1959（昭和34）27才

11月長男剛太郎生まれる。

1960 (昭和35) 28才

*月、アメリカ領事館札幌支部で短期アメリカ移民事業に応募し、二次で不合格(妻子を同伴しないという本人の意向は受け入れられなかったと、藤田はふり返る)。

9月、長田良三宛に書簡を送る。「僕は非常に元気に毎日働いています。日産化学で1日380円なりをもらって働いているんですが、いろいろ面白い事と考えさせられる事多く得るもの大なりです。昭和7年に生まれてから28年たっているんですが、よく考えて見ると僕の精神年齢は、その年齢に比例して成長していないのではないかといささか考いさせられています。外面的には妻と一子あって体格はいいし、一人前ありそうなんですが...?別にシンコクに『人生に疑いを持つ』なんて柄ぢゃないんですが、成長していない自分を見ることはつらい事だと思っんです。4Hクラブとか青年団とかその時期には意義のある事だと信じてやって来た過去の事も結局はどんなプラスが自分と自分の周囲に残されたのか...僕には唯『人間の持つ善意』を信ずるにいい友人を得たプラスのみがある様な気がしております。そしてその『善意』だけのぬるま湯につかり過ぎて、厳しい自己鍛錬が全然なされなかったこの4、5年であった事にも深い反省をおぼえています。(改行)アンデパンダンに出したとゆう鎌田さんの絵、僕は見なかったし、それがどんものも知り得ませんが鎌田さんが自己の生活範囲の外で何かをやるようしている意欲には頭が下がります。...(改行)この様な気迫もなく学問へ背中を向けて暮らしているこの頃の日々、『人生にマンネリズムを感ずる様になればもう青年ぢゃない』とゆう言葉はけだしその通りなのかも知れません。(改行)いろいろと考いさせられるこの頃ですが、地味に成長してゆきたいと希っています」(長田良三宛、1960.9.3消印、9.1日付、差し出し場所記載なし、差出人イニシャル)

9月24日、留岡幸助胸像の除幕式が北海道家庭学校で行われる。胸像をのせる礎石の正面には「一路到白頭」の座右銘が刻まれる。

1961 (昭和36) 29才

1月26日、佐藤藤三郎(『山びこ学校』の卒業生代表)と過ごす山形上山温泉から長田良三宛に書簡を送る。「日本のどんな所にも善い夫婦が暮らして生活をしながらかるための理想を求めている-そんな平凡な事を、酒を呑みながら語り聞き共に寝て、そして起きているだけです」(長田良三宛書簡、1961.1.26付け)。

この書簡について、後年藤田は「子供も2人になり、家を村を出るにはギリギリの年齢だと思ひ定めながら決めかねていた時だと思ひます」と語る(河原宛書簡、2009.6.5函館消印)。さらに回顧して藤田は、「悩み苦しんでいる藤三郎さんを元気づけながら、3才年上でもう少して30になる自分のこれからをどうするか苦悩の中にいました。(改行)やっぱり家を出よう、この村を出ようときっぱりと決断したのは昭和36年4月頃だったと思ひます。不思議だったのは、相談した友人3人(長田さん野田さん、高坂りゅう子さん)セツ子の母、りゅう子さんの母も考いてからすぐに『その方がいいかも知れないね』と賛成し、秘密裡の出奔の手伝いを懸命に応援してくれました」と語る(河原宛書簡、2009.6.8函館消印)。同じ書簡で、父についてふれる。「父は僕の出奔を心底でうすうす感じていたと思ひますが、亡くなるまで一言も発することはありませんでした。...母は強く元気でした。この母なら父と2人で生き延びて行く」と僕は最終的に判断して出奔を決断したと思ひます」(河原宛、2009.6.8同上)。

千代田を出る動機の一つについて、藤田はまた次のように明らかにする。「伊藤整夫妻との

親交を支えに (...) 頑張ってきた母の烈しい気性と学殖は僕と結婚して我家に入ってきた19才の僕の妻セツにとっては大変な負担でした。(改行) このままではセツがこわれてしまう~僕は真剣に悩んでいました」(河原宛、2009.7.18)

「老いつつあった父母を残して家を出たという意味で『非行』だったといまにして深々と反省するものがある」(「もうひとつ」p.264) という思いも記されている。

3月、次男節男生まれる。

千代田村を出て、7月19日、歌志内市の炭坑の一つ住友石炭鉱業株式会社「住友歌志内炭坑」に入社(1962年11月まで。「まして」p.252)。同炭坑は当時最盛期。1971(昭和46)年に閉山。

短期契約坑員(3ヶ月ごとに更新)として働く。盆正月も休まなかった。これまでの「プチブル」という批判を意識していた。さいごには本採用になった。本鑑(直轄本採用)坑員は5000円/日、短期鉱夫はその3割、新米の短期鉱夫はその半分。「地にへばりついでの仕事に耐えられたものの、先山に対するコンプレックスにさいなまれ、正直、辛い辛い毎日だった」。(「まして」p.266) その間、『現代史資料(1) ゾルゲ事件(1)』みすず書房、1962、1800円、『現代史資料(2) ゾルゲ事件(2)』みすず書房、1962、1800円、などを定期購読で購入。

7月、長田良三宛に書簡を送る。

「7月の地下でああ無事に働いています。20日から無期限ストに入りたった今(24日朝7時)解除。(改行) 会社も炭労も、出すに出せない、ひくにひけない、涙ぐましいストライキでした。甚だ客観的な言い方ですが、僕等ははまだ本採用になっていないので準社員、即ち準組合員とゆう事になり、期末手当ストライキには何の関係もないのです。(改行) だけどストになると坑内には入れないので、1年ぶりに太陽の下で3日間丸太かつぎのアルバイトをしました。(改行) いい風が吹いて7月の太陽がまぶしくして、いつしか『もぐら』の習性が身にしみついた自分に感動しました。(改行) 三井芦別で相次いで坑内事故があり僕等も他人事でない地下の厳しさを考えさせられております。三井、三菱、住友とゆう大手のヤマは保安についてはかなり留意しているのですが、やはり石炭値上げつまり安い石炭を出す為には、つい保安にかけるカネを差しひかえるとゆう傾向はたしかにあります。とに角、自分の生命を大切にしながら頑張りたいと思っています。...(改行) いろんな人間を知りました。(改行) だけど人間的に善いなーと思うのはやっぱり大野の人です。大野でかなりいけ好かないタイプの奴でも、ここでは善い部類に入ります。...(改行) 人間を見る視野の大きくなった事だけは確かです。僕は僕なりのペースで生きています。僕は今自分の健康に注意しつつ最大限の予算で本を読んでいます。自分を肥せたいー精神的に。」(封書なし、推定1961年7月)

9月、長田良三宛に書簡を2通送る。

「大野から離れて1ヶ月有余、ようやく秋らしい風が吹いて来て虫の音がしきりに耳をうつようになりました。(改行) 僕もようよう炭坑の生活に慣れて来て元気に暮らしています。節(セツ子-河原注) も子供達も歌志内の生活にとけこんで 朝晩を親子4人ささやかだけど楽しく暮らしています。(改行) 離れて見るとずい分と故郷はなつかしいけど帰りたいとは思いません。少しづつこの地に人を知って来ましたが『友人』と呼ぶにふさわしい人間関係はまだ生まれていません。僕自身、対人関係は消極的な方だし、じっくりいろんな人達と、いろんな話をしています。(改行) 大野の人達と比較して『考え方』が正確です。労働者としての意識がそうさせるのかも知れませんが、又それぞれに故郷を離れて来て働いている『生きる為の積極的な意志』の故かも知れないと思っています。...(改行) 2日と9日にストライキでした。

僕等も『炭労』のハシクレとしてストライキしましたが、『スト』とゆう事が実に正確に行はれる事に感嘆しました。何の疑いもなく、『炭労』中央からのスト指令が整然と実施され、中止される事に、何かモサッとしながらも感心しています。労働者、そしてその権利と義務、これから勉強したいと思っていますけど、僕にはまだ『資本家』でも『労働者』でもない百姓の意識が雑然と頭にあってヤヤコシイです。昨日新藤兼人の『裸の島』を見ました。…一つの夫婦が『生活』とゆうものをこんなにも見事に表現し得た演技、新藤兼人が最後に『しかも彼等は生きてゆく』とゆうタイトルを入れた気持ちが切実に胸を打ちます。…(改行)一昨日は旭川常磐中学校の吹奏楽を聞きに行って来ました。一昨年全国一位、昨年2位とゆうこの吹奏楽団員50名の見事な音楽に圧倒されました。」(長田良三宛、1961. 9. 3消印、差し出し場所記載なし)

「とに角大野はなつかしい人に満ち、なつかしい風景が僕の心に生きています。…僕は相変わらず以上に元気に暮らしています。8月分給料2万円、ストーブを買ったりして自分の家を創りつつあります。僕の『家』(千代田)の事や僕の今度の家を出た事など貴兄には理解いかない事が多いでしょうがそれでいいんです。僕は、僕の家を、歴史を、あまり語りたくない以上に、『これでよかった』と思っているからなんです。ずい分家を出ようと思い、実際にここでも飛び出て来ましたが僕の『家』への反抗は今度で終わりです。両親は両親でやっていくでしょう。僕にもし文学的な才能があったら、僕の生れ、育ってきた『家』と何かについていつか書いて見たいと思っています。『文学とは自己とその周囲を語る事から始まる』とゆう私小説的発想からすれば僕にも小説は書けそうな気がしています。…僕等はお互いにずい分忙しいし、何か規制された生活の中で暮らしていますが『人間の本当の生きる意味』だけは見失いたくないと思っています。…窓にはしきりに虫が鳴いていて秋-、静かに酒でも呑みながらいろんな事を語りたいですね。僕はこちらに来てからすごく丈夫になりました。労働者として、炭硯のはしくれハシクレとして、節の頼りある亭主として、剛太郎と節男の善き父として、まずは悠々と暮らしています。」(長田良三宛、1961. 9. 14消印、差し出し場所は空知郡歌志内市文殊市街太陽ハイヤー向い)

10月3日、長田良三に書簡を送る。

「前略 理論と実際、理想と現実、人間社会の宿命みたいなもんですけど、だからといって理論や理想を学ぼうとしなかったり持とうとしない事はいけない事だと思います。逆説的に考えるならば、理論と実際、理想と現実との間にギャップがあるからこそ我々の生きがいがあるーと考えています。その意味で貴兄が社会教育主事の為の勉学を終え、大野町に帰って?然としている日々こそ大切なのではないのでしょうか。(改行)何十年もサラリーマンをしてクタびれた顔(背広ではなく)をして老年期をむかえている多くの人間...それはそれでいいのではないでしょうが、少く共僕等だけは『自分だけの何か』を生涯に創りたい。(改行)貴兄が大野に在って『自信を失った』とゆう言葉は、確かにその通りだと思います。それは何かをやらうとするからこそ『自信を失った』とゆう言葉が出るのであり、その様な意識のないサラリーマンからは自信を失ったとか自信を得たとかの言葉は聞かれないからです。変な自信を持つよりも、大いに自信を失ってその上で長田良三の生き方に遠くから注目しています。…(改行)僕も別にどうなろうとか何とかは考えていませんが、ひっそりと地味に生活しています。今は自己充電の時期だと思っています。こちらに来てから本ばかり読んでいます。11月から秋田大学の硯山学通信教育を始める予定です」(長田良三宛、1961. 10. 3消印、差し出し場所は空知郡歌志

内市文殊市街)。

1962 (昭和37) 30才

5月、長田良三に宛てて書簡を送る。「君が帰って、いささかぼんやりしています。『大野』が来て、『大野』が帰った様な気持ちです。...これから又地底に行かねばなりません」(長田良三宛、1962.5.17付、19消印、差し出し場所は、歌志内市文殊257住友社宅1の8, 便箋1枚)

8月、歌志内炭鉱労働組合の「歌労報」第94号(8月10日)に「青春について」発表。図1。伊藤整の夫人と「文学少女」として旧知の仲で、後に小学校の教師となった母と、その部落の大地主の二番目の息子の文学青年であった父との若き日の歴史にふれ、以下のように記している。「このような話を通して、自分の青春とこれからの私の人生というものについての指標を静かに考える事がある。何も『長』のつく偉い人になろうとか、有名になろうとかいう野心ではなく、少く共、毎日のくり返しの仕事の中で『未来を持つ精神の生活』だけはしたいという事だ。私は去年6月、『農業』をやめて他の職業につこうと思立って『函館職安』の紹介でこの歌志内に来た。...子供が2人いて、妻もかつての豊かな乳房と比較にならない様な『やつれ』を見せているが、でも私はやっぱり『青春』の中にいる。それは18,9の頃、若い娘を真剣な目付きで見た若々しさではなく、何かはつきりした目的を持ってスタート台に立った落ち着きにした若さである。精神的に『老いる』という事は人間として進歩がとまったという事だ。...私は酒も好きだし女もずいぶん好きだ。けれどもそれだけがすべてで毎日坑内に出たり入ったりするだけの人生だったら、もう、そこには、『青春』はないのだ。すくなく共前向きの姿勢の人生が失われたら、『青春』ではなくなる。...この歌志内には労組にはコミニストもいる様だし、社会党员や民主党員もいる様だ、私は勿論準坑員で準組合員だからそんな組織とは何のつながりもないし、又、つながりを持つとする気持ちもない。私は農業をやめて始めて他の仕事について労働者となっただけに、労働者としては未熟だし、言葉を変えて言えば労働者としての感覚は新鮮だ—と自分では自負している。労働者ずれも、炭鉱ずれもしていない。



図1 藤田俊二「青春について」。1962年、炭鉱労働組合の機関誌「歌労報」に掲載された。



図2 1963年、炭鉱退職後、農業機械販売店として働く。

この様に自分を客観的に見れるのは、私がまだ『青春』の中にあるからなのだろうと思う。」

8月、長田良三に宛て書簡を送る。上記機関誌も同封。

「4, 5日前に僕達の山でも2人死亡、歌志内駅の向こうにある北炭空知砒で4人死亡と、連日の炭砒事故にいささか『ウンザリ』しています。死ぬといふ事と背中合わせに働いている毎日...アアー死なないと思っていますが、知っている人が死んだりすると、変な気持ちになります。...機関誌同封しました。この頃になって、思う存分の事を書いたり話したりする不敵なツラダマシイをとりもどしつつあります」(長田良三宛、1962. 8. 11、差し出し場所は、歌志内緑町住友社宅14の1)

11月住友歌志内炭坑を退社する。

12月、**倶知安町遠藤機械店に勤務**(1963年5月まで)。図2. 大野農業高校の恩師の斡旋で就職。クボタ農業機械の販売員として働く。「半年で売ったのが耕耘機2台、発動機3台だけだった。僕の致命的な欠点は根っからの機械音痴」(「まして」、p.240)

1963(昭和38)31才

1月、長田良三に宛て書簡を送る。住友歌志内炭砒での労働を通じて腰痛になり「坑内労働は無理」と医者宣告されるとともに、臨時労働者の本採用試験が取り消しになった事情にふれた後、以下のように記述する。

「僕自身こうしてやめて来てみると炭砒労働者の哀しみ特に恵まれない臨時労働者や組夫労働者の弱さと哀しさが切ない位に感じられます。歌志内を去る時、12人の仲間が一晩僕の為に吞んでくれ泣いてくれました。『藤田さん、倶知安に行ったら呼んでくれよ』涙声で言っていた12人の仲間のこと、僕の人生に貴重な記憶となりました。...そんな切ない迄の足跡を歌志内に残して1年4ヶ月...これからの僕の人生にプラスになるのか知れない年月を胸にか

みしめて1962年12月31日を過ごしています。(改行) ずい分センチなペンになりましたが、倶知安に来る迄に札幌に5, 6度出て仕事をさがしました。田沢勇が夕張の山の仕事をさがしてくれたり、新富先生が北大学生寮の炊事婦にと節の仕事の為に何度も歩いてくれたり、倶知安では勝司先生が現在の仕事を確定してくれて12月2日こちらに来る様な訳です。倶知安に来る途中札幌駅ホームで見送ってくれた新富先生が(俊二よ、貴様は何か完成させるとかモノになろうとかする直前にいろいろ理由でダメになるから今度は必ずモノになれよ)と説教してくれたのには感動しました。(改行) 正にその通りなのかも知れません。(改行) 今、30代に入るに当たって今迄のいろんな事をふり返りつつ人間としてモノになろうと思いはじめています。…僕は今小樽自動車学校余市教習所に通っています。どうしても腰の調子が好くないので、自動車に乗れる様になって機械にくわしくなったら生きていけるだろうと判断したからです(長田良三宛、1963. 1. 消印推定、便箋6枚、差し出し場所は、倶知安町南三条東1丁目中川アパート内)

3月18日、風邪をひいたその日、朝日新聞「新人国記-北海道篇」に掲載された「留岡幸助と北海道家庭学校」(入江徳朗)の記事にふれる(「まして」p.241)。

*月に、校長(第4代)留岡清男に長文の手紙を書く。投函して3日後に、清男から「速達」が届き、「思わず涙が出た」(「少年期」p.268)

4月、長田良三に書簡を送る。これまでの出来事を回顧する。「家出は6回位-。21の時初めて東京に行った。2ヶ月で帰郷。その頃はいろんな事が僕のみだれた心を救ってくれると思った。カトリックの教会やプロテスタントの牧師さんが僕の為に祈ってくれた。でも宗教では救はれなかった。自分の家への抵抗と社会変革への道が一つになり得ると確信する様になって急激に僕は左傾した。その頃山びこ学校とゆう一つの評価された文集を手にして僕は佐藤藤三郎の卒業答辞に心をうたれて手紙を出したら返事が来た。それから藤三郎との友情が育った」。この記述の後、共産党活動では満たされなかったこと、千代田の4Hクラブ、青年団と交流が始まり、そのなかで妻になる節子や、長田を知るようになったこと、母とのいさかひのこと、などにふれる。最後に以下のように記す。「歌志内での1年半の生活は有意義でした。僕はこれからも自分の人生を前向きなものにしたいと希っています。室生犀星はいいことを書いていました。『人間には最もいい気質で生きる時代があるものだ』と…」(長田良三宛、1963年4月26日、差し出し場所は、倶知安町南三東1中川アパート)

5月、遠藤機械店を退職。

6月、北海道家庭学校に就職。その数日後の書簡。「酔っぱらって酔っぱらって生きてきましたが、これからは酔っぱらはないで生きてみます。留岡校長に着くなりおこられました。僕は事前に何の電報もうたないで行ったので『何時に着くとはっきりと知らせなければいけない』とゆう訳です。…給料は僕と節を合わせて一万八千円、…僕の配下五人、十七才の奴に『何して家庭学校に来た』と聞いたら『ザッピンかっぱらったからです』と答えました。目付きは悪いけど本質的に悪そうでもないようです。まだまだ僕の考えは甘いですけどー」(長田良三宛、1963. 6. 3消印)。

「“革命”にかわるものをつかんだ。自分に合う仕事はこれしかないと思った。給料はいつでもよかった。」(2006. 7) 初任給は3000円。住居、食物(米、みそ)は支給。「子どもは公立の大学なら出す」といわれた。一般に2万円程度。

7月、向陽寮長(～1964. 3)。図3。「家庭学校に来て2ヶ月近く、ようやくここでの生活

に一つの自信と確信を得たので多くの親類と友人にペンをとる気分になりました。留岡校長は偉いです。そして、その父親の留岡幸助は更に偉いし、素晴らしいと思います。今でも寂しい山の中に、大正3年に入ったとゆうその事実だけで頭が下がります。貴兄もいつか、なるべく8月中に1度ここに遊びに来て下さい。社会教育について一つの自信を得ると思います。…僕は精米部長？子分の生徒5名、にぎやかにやっています。僕は農業定時制をやっと出たり入ったりしただけの学力なので基礎から勉強しようと思っています。本はずい分読めます。かたっぱしから雑学をみにつけつつあります。一週間位前からアコーディオンを練習しています。『ふるさと』と『君が代』をやれます。ハハハー。…鈴木先生には悪かったけど、思いきってここに来て良かったと思います。鈴木先生怒っているか音信なし…」（長田良三宛、1963. 7. 23 消印、八ガキの両面記述）。図4。

「僕も少しづつ家庭学校の生活に慣れて来ました。僕も17人の先生方と同じく『藤田先生』なんて呼ばれて今でもちょっとてれくさいですが、要するに月、火、水は二町の野菜畑、木、金、土は精米所で日曜はひる寝」といった日々です。生徒は85名僕の子分は6名、その子供達を明るく育てるのが僕達の仕事です。…85名の2/3は親のない子、その他両親がいても離婚しているもの、父親が妾を持ったので母親が自殺したといったケースもあり社会のゆがみ、夫婦のゆがみ、人間のゆがみがこの子供達に不幸を与えているのです。本当に可愛相な子供達-可愛がってやらなければと思いつつ、仲々どうして油断もすきもない子供達ばかりです。15才のくせに左のうでに『恵美子』といれずみしている子、二十六回無断外出の記録をもつ子、京都まで無賃乗車して行ってくる子、先生の給料袋をポケットからすり取る子、多シサイサイです。笑ってばかりいれば馬鹿にされるし、怒ってばかりいればネジくれるし、とにかく先生と生徒の心理戦のようなものです。…家庭学校では僕は年の割には何でもやって来た人とうこ



図3 1963年、家庭学校に採用され、はじめは向陽寮長として着任した。その時の鳥瞰図。

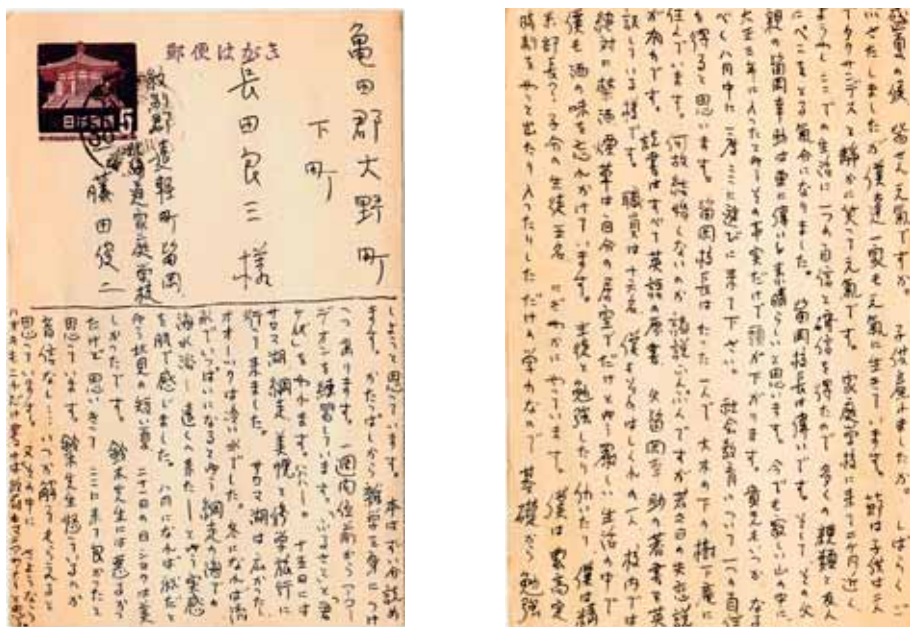


図4 1963年7月、長田良三宛のはがき。

とになっており、校長昨日教務室で僕を捉えて云はく、『藤田先生が来てから家庭学校の戦力は倍加したね』とお世辞を言ってくれたけど、とにかく僕の生きる場所としてこれ程最適の場所はないと感謝している次第。(改行)歌志内の炭坑の友人から時々便りが来ます。本採用になったとか、怪我をしたとか、誰が死んだとか、一つ一つの便りに歌志内の体臭が感じられ涙がでる程なつかしくなります。厳しい生活を賭けて生きた地底の現場とその頃の心情が無性に僕をセンチにもさせます。…(改行)千代田の両親のことも考えていますが、今の所何とも結論が付きません。(改行)今はどの様なことをしていますか。絵を描いていますか。(改行)何を読んでいますか。(改行)僕は猛烈に何でも読んでいます。手当たり次第に。(改行)アメリカ史とフランス革命がこの頃読んだ中で最も感銘を深くしました。僕等の生涯は短く、知ることは余りに小さい—そして、知らないことの何と多いことよ—。『読書が趣味です』なんて言って文学全集など並べている幸多い人に万才。僕は本でも読まなければ、知ることも、人の意見を聞くことも、世界の国々のいろいろな歴史と人のことも得ることができぬ。だから僕には読書は水と同じ必要欠くべからざるもの(少しキザかな?)趣味は音楽と酒です。ハハハ—。…」(長田良三宛、1963.9.24消印)

1964(昭和39)、32才

2月、長田良三に宛て書簡を送る。

「僕も家庭学校で何となくみとめられて、12月から一つの寮舎を任せられ寮長として6人の生徒の責任を持つようになりました。(改行)同封した図の通り僕の寮は校門のすぐそばの寮、生徒は割合いのばかりをえらんでよこしてくれたのでそんなに問題はないのですが、一人一人のカルテ(非行歴、家庭歴、児童相談所での記録等)を見ると涙がでます。(改行)敬紀

(中学1年)母は6才の時死亡、父は小学校1年の時に結核にかかり以後釧路道立療養所で療養していたのですが、一昨日危篤の電報が入り引き続き死亡の電報、学校の方から手のあいている先生と本人とすぐに昨日の朝釧路に発ち、今帰ってきました。(改行)今朝、療養所で病院の人と姉と二人で葬式をしたとの事、ひっそりと一人の人が死に二人の子どもが孤児として残され.....本人は父がうでにはめていた時計と目さまし時計を大切にかかえて寂しげに帰って来たんです。(改行)小っちゃくて(赤ん坊の時からの栄養不良で)いじけて、くらして、そんな子の将来の責任を考えると胸がつまります。(改行)康夫18才...あとの4人もにたりよったり、こんな子ばかりが85人9つの寮に分かれて暮らしているんです。(改行)それだけに卒業して行った子が訪ねて来たり、便りをよこしたり、電話をよこしたりすると目頭が熱くなります。僕のように去年来たばかりの青二才にでもそんなつかしい生徒が5,6人八ガキをよこしては、寿司をうまくにぎれるようになったとか、タイルをはるのをおぼえたとか書いてよこします。(改行)ここには18名の先生がいて、古いのは42年新しいのは僕で9ヶ月と様々です。そしてその古い先生達の唯一の生きがいと喜びは卒業生が訪ねてくる時です。(改行)オペラの*** (氏名記載河原注)が2回生とかで、生徒はそんな有名な人を自分達の同列に考えることによって何か気分良くなるらしいです。18人の先生の中、寮長として寮を持っているのは9人、あとの9人は事務とか車とか手伝いとかでここでの寮長といふことは教護の第一線にたつことでありそれだけの責任と発言力を持つわけです。...一人一人の先生に性格があるように、生徒に対する対し方もそれぞれに変わります。去年の11月頃までは僕は他の先生のやり方をキョロキョロ見てばかり来ましたが今は僕なりのペースでやっています。(改行)それぞれに育て来た環境、性格によって、ぶんなぐって直していく子と、じっくり話していく子と2通りに分けて、ぶんなぐる時(他人のものをかっぱらったとか、おどした時とか)は思いきってぶんなぐります。だけど、なぐったあとは何とも言えないいやな気分になります。だからなるべくなぐらないことにはしていますが、なぐらなければならぬ場合も1ヶ月に2度はあります。去年の6月、僕が留岡校長に手紙を書いて、それから面接に来ていよいよ藤田とゆう人が来るとゆう事を全校で知った時もどうせ2,3ヶ月ももたないだろうと、思ったと今皆が笑って言っています。(改行)僕の経歴は元百姓で、農学校は定時制で、炭坑夫もしていたし、セールスもやって来たというのではどんな奴が現れるのかサウザウできなかつたらしいです。そんな僕がなんとなくここに定住できるようになったのは、僕の今迄が本当に大切に生きています。(改行)気持の上でずい分惨めな育ち方をしたとゆうこと、青年団や4Hクラブで多くの人を知ったこと、恋愛したこと、共産党の人たちを知ったこと、無着先生や藤三郎を知ったこと、借金ばかりして酒ばかり呑んだこと、貴兄や武ちゃんや外崎さんとストリップを見たこと、炭碓で暮らしたこと、300メートルの地下で死にかかったこと、労働組合運動って一体なんだろうと思ったこと、クボタの耕耘機をいいかげんな話で何となく調子よくして6台売ったこと、そんな過去が映画のフィルムのように生きていて貴重だった20代に感謝しています。...留岡校長はいい人です。僕をみとめてくれたことだけで僕はこの人に頭が上がらないんです。唯校内ではものすごくワンマンなので校長の前にはと皆サイケイレイです。『クソータヌキコンチクショウメとか、ジシン(自信)カジョウジジイ(爺い)』とか反撥もあるにはありますが、これはそうゆう面もあるので仕方ないことです。...それからお願いがあります。(改行)本当はこの事をお願いしようとこのペンをとったのですが、僕の寮の生徒に手紙とか古いマンガの本とかを直接の名あてに送って下さることをお願いできないでしょうか。(改行)手紙がほし

い、小包がほしい、それから親のない子等はそんな楽しみが全然ないんです。青年団とか婦人会とか社会教育委員会とかにアピールしていただけないでしょうか」(便箋9枚、長田良三宛、1964. 2. 9消印)

4月、長田良三に宛て書簡を送る。

「千代田に行って両親の生活を詳察して来て、様々の事を考えております。母は相変わらず元気でした。家の母はああゆう人のままに一生を終ることになると思っています。(改行)父は弱った? 本当に老人を感じさせて痛々しく、今も僕の胸に父の弱った姿がうかんで離れません。どうしたらいいのか。(改行)今更、千代田に帰る気はありません。(改行)千代田に帰って父と母を見ながら僕の家の水田に養護施設を作って30人位の悪童共集めて見たいとゆう考えもあって靖本町長に相談したりしましたがこれも簡単な事業ではありません。結局、遠軽に二人を引取ると思っています。…僕はここで漸やく一つの道を歩み始めています。キザな言葉になりますが、家庭学校でこの仕事をやるために今迄の青春があったとさい思っています。その意味で留岡先生は僕の生涯の恩人になりました」(原稿用紙3枚、長田良三宛、1964. 4. 17消印)。

4月、洗心寮(6名)長(~1965. 3)

4月、札幌南高等学校(通信制)入学(有朋高等学校に校名変更)

9月、留岡清男『教育農場五十年』岩波書店。

1965(昭和40)33才

4月、石上館(12-17名の大寮舎)寮長(~1993)

日誌を書き始める。正幸(10. 20~)、幸二(11. 25~)

一人一人に即して日誌を書き始めたその様式について、後年(1976年)藤田は説明している。「無我夢中の手探りの中で、家庭学校の伝統に学び、他教護院の多岐にわたる実践に学びつつ、どうしても自らの仕事にくみこめない事の一つに、いわゆる『生徒の行動観察記録』がありました。どの様に観察し、どの様に記録するのか、考えあぐねていた時に、『教護』136号(1965年発行-河原補)を手にし、斯道学園、西野勝久先生の『夕風とてんぐ岩』に大きな啓示を受け、自分なりにものを書き誌し始めた日が昭和40年6月13日でした。『とにかくにも、それはその時、その時における、私と子どもたちとのかけ換えのない真実なので、もはや私にはどうすることもできないからです。』という西野先生の言葉を、11年書き続けて来た今、改めてずしりと胸にしています」(藤田「日誌抄-Kのこと-」『ひとむれ 教育特集号』通巻411号、1976. 9. 1)。「寮長二十年のくぎりに」昭和58年度全国教護院教護研修会、1983年11月16日、にも同様に、より立ち入って回顧する。

西野の文章とともに、武蔵野学院井上肇『山鳩のうた-教護院の少年たち-』白鳳書院、1950、も少年一人一人個別に記す日誌の方法として指針になっている。本書は、寺崎好に紹介される。著者井上は北海道家庭学校の元石上館寮長で、寺崎好の長女の主人。

1966(昭和41)、34才

2月16日、寮生にソロバンを教える。以後、日課になる。

3月、有明高等学校卒業。

1967 (昭和42) 35才

1月、父藤田敏三(1904-1967、明治37-昭和42)死去。

7月、「寺崎好先生の強い示唆」を得て、「公的な記録」を書き始める(「まして」p.292)。

寺崎好は、留岡清男『教育農場五十年』では、「いったん引受けた仕事に対する仮借なき厳しさ」(p.133)があったと評された。その寺崎好先生から「自分たちは少年の記録というものを全く書けないで来ましたが、藤田さんなら書いて行ける。是非書いて行って下さい」(河原宛書簡、2009.4.10宮崎消印)と強く言われ、藤田は書き続けた。「書き続けてすぐの頃から寺崎先生に持って行って必ず読んでもらいました。丹念にレンズで読んで下さった寺崎先生の励ましが大きな僕の支えになり続けました」(同上)。ぜひ記録を書きなさいと奨めてくれた。「自分も書きたいと思っていた。百姓は自分の考えをもたないとだめだと思っていた」。同年の蔬菜部報告で、「最後に、寺崎先生の土壌検査に感謝したい。すでに遺暦を過ぎておられる先生が畑に座って土を採っては袋に入れておられる姿には唯頭が下がるのみだった」(『ひとむれ』第299号)と藤田は記す。

1968 (昭和43) 36才

・この年、日誌を留岡清男校長に見てもらおう。新校長が来られる前に、「自分を採用してくれたのは留岡清男先生だ、新しい校長が来る前にこの記録を読んで頂いて御意見を頂こう」(河原宛書簡、2009.4.10宮崎消印)と日誌、子どもたちの日記、「行動記録」、卒業後の子どもたちの軌跡の記録、数センチ分のノートなどを校長留岡清男に見せる。「あなたの記録は実にいい」と励まされる。「涙の出るほど嬉しいことだった」(「もうひとつ」p.270)。「『生活綴り方などというものは感傷(「鑑賞」か-河原)に始まって感傷に終わるだけのものだ』と切って捨てた昭和12年頃の留岡清男先生のことは、書き始めから強く意識していたことは確かで、留岡清男先生のその時の後姿は深く鮮明に記憶しています。僕の日記も、少年の書いたもの書き続けているものは生活綴り方ではないが、ある種の生活というか人生の綴り方というかなのもか知れないと思い始めて書いて行くことにひとつの方向性を持つ始めたことは確かです」(河原宛書簡、2009.4.10宮崎消印)

・『マカレンコ全集』第6巻、1968、第4版、明治図書、1300円、などを読む。重要箇所について、傍線が入る。「なによりもまず、教育者は、自分の隊の成員をよく知っていなければならない、被教育者ひとりひとりの生活と性格の特質とを、かれの欲求・疑問・弱点および長所を、知っていなければならない、ということである。りっぱな教育者は、かならず自分のしごとの日誌をつけて、そのなかで被教育者たちについての個々の観察、あれこれの人物を特徴づけるできごと、彼らの対話、被教育者の前進運動を記入し、すべての子どもたちに、いろいろな年齢でしばしば生ずる危機や急変の現れを分析していなければならない。いかなるばあいにも、この日誌に公的な記録簿の性格をもたせてはならない」(同巻、p.76)。下線部分は特に太く、文字全体を朱筆する。図5。

1969 (昭和44) 37才

4月、谷昌恒(1922-1999/2000、大正11-平成11/12)が第5代校長として就任。



図5 1963-1968年の頃、留岡清男校長時の職員会議の様子。中央が藤田。『川上重治写真集 家庭学校と留岡清男』北海道新聞社、1978、より。

1970 (昭和45) 38才

『ひとむれ 収穫感謝特集』通巻335号に詳細な内容の「1年の仕事を終えて」を報告。ひととおりの収穫野菜の報告の後、「生産と教育が相互にプラスになり得ているかについて、改めて問題提起したいと思います」と記し、留岡幸助の三能主義とともに、マカレンコを引用。

1971 (昭和46) 39才

1972 (昭和47) 40才

7月10日、寮文集『輪』創刊 (発行人藤田)。「卒業生からの便り」1篇、「卒業生の消息」11名、現在の寮生の紹介12名、寮生3名の作文、などから構成される。作文を載せた保護者の父親からプライバシーの問題だととられる。以後は続刊せず。

1973 (昭和48) 41才

札幌南高校通信教育部卒業。「高校を卒業するのに25年かかったことを恥ずかしいとは思わないが、やっぱり辛いことだったと思う。しかし、高校を遂に卒業した！という深い喜びは、家庭学校に職を得させていただいたこととともに、自分の戦後に一区切りついた、つけ得たという意味で、有難いことだと何かに向かって合掌するものがある」(「もうひとつ」p.270)。

1977 (昭和52) 45才

2月3日、留岡清男(1989-1977、明治31-昭和52)、闘病生活の未死去。78才。

作家高井有一より取材を受ける。高井「ひとむれの野辺」が『世界』第382号、9月に掲載される。前年、機関誌『ひとむれ 教育特集号』通巻411号(1976.9.1)に発表した藤田「日

誌抄-Kのこと」や、すでに膨大な量に蓄積された日誌について■井はふれる。「『朝でも夜でも、時間を見つけてはこれらを書いていますが大変だとは思いませんよ。大変だと思ったら出来ませんね』と藤田氏は笑って言った」と記されている。

1979 (昭和54) 47才

斎藤茂男のルポルタージュ『父よ！母よ！』上、太郎次郎社、1979、のなかの「白い森の学校」の記述で、藤田の取り組みも紹介される。家庭学校着任までの藤田の足跡をたどる（同書、pp.133-135）とともに、日誌の一部も写真で紹介される。「少年の背負っている荷を、少年とまったく同じ重さで感じていてやろう-寮長たちは、そう思っているにちがいない」（p.65）とある。比較的良心的に記述された問題提起的なルポで当時反響があったが、取材対象の藤田側からの思いとすれば、距離感のある記述に「隔靴搔痒を感じ、自分も書かないではいらなかった」と後に藤田はふり返った。その年の7月、前掲「日誌抄」の記述内容を含む『もうひとつの少年期』**晩聲社、が刊行**。本書を原作として1984年に映画「もうひとつの少年期」が製作される。

1983 (昭和58) 51才

11月16日、全国教護院教護研修会で「寮長二十年のくぎりに」を発表。少年一人一人の「長技」を見極めることの大切さを論じた留岡幸助「感化事業の真諦」を引用し、藤田は「私共の指針となっています」に続けて、次のように記す。「この少年にどんな長所があるか、この個性のどこを褒めて行ったらいいか、このことは取りたててべたべたとその少年をほめそやして行くというのではなく、自分の最も得意としているものを大人が認めてくれたという誇りを身体の内から湧き出させる自然なものにしていくという地道な鼓舞が大切だと思うのです」。これまでの経験を踏まえて、藤田自身の教育方針をふり返って簡潔にまとめた重要な文書。本文は全18ページ。

1989 (昭和64) 57才

寺崎好（札幌市）より、札幌で再会できたことに対する感謝の意を伝える来信（1月29日付け）。「重いF（少年の姓が記載-河原注）くんのカルテと其の他は早速拝見いたし丸5日も要しました。飽くことなくさながら自分がサナブチにある如く感じてまことに有がたいものでした」と記されている。

また、寺崎好（札幌市）より、「お借しいただきました6人の『カルテ』40冊」を読了したことを伝える来信（4月4日付け）。「小生はカルテと共に2ヶ月をすごしました。その間毎日がドラマでした。全国に教護院は57位あるのですが、先生のように少年の気心をとらえゆく人はありません。たいしたものです。この記録は毎日とりくんで飽きることはありません。先生にかんしゃしながら読んでいます」と記されている。

「寺崎先生は75才頃に札幌の娘さんの許に退隠されてから僕の記録を隅から隅まで読んで下さり、僕は寺崎先生に励まされることで留岡幸助先生、留岡清男先生に励まされている様な有難い気持ちでした」と後に藤田は回顧する（河原宛書簡、2009. 5. 2）

1989 (平成1) 57才

寺崎好 (札幌市) より、「カルテ約40冊」が届けられたことを伝える来信 (2月5日付け)。「この記録は日本一のものでしょうかと今も尚思っています。有がとうございます。貴重なものです。86才になってこう云うものを読めるなんて生命冥加です」と記されている。

1990 (平成2) 58才

3月13日の日誌記述をもって最後とする。この時点での石上館寮生徒は11名。

3月17日、**石上館寮長職を捧 一に委ねる。**以後は、楽山寮の寮長兼教務部長にあたる。

1992 (平成4) 60才

『ひとむれ収穫感謝特集号』通巻612号の「後記」で、教護院における学校教育導入についてふれる。「私共も基本的にはこの流れに賛成していますが、拙速は避けながら、如何にして家庭学校の伝統である『労作教育』と両立して行けるか?を模索しつつこの1年でもありました」と記す。

11月、寺崎好死去。

1993 (平成5) 61才

北海道家庭学校を60歳定年で退職。大野町 (現在北斗市) 千代田の郷里に帰る。

「誰れが悪いのでもない -ある父子の1960年から1994年2月までの日々-」(原稿用紙157枚)、帰郷後のこの年に執筆。1978年5月、札幌市真駒内団地内で起こった少年通り魔事件の少年の記録。タイトルは、萩原葉子『誰が悪いのでもない -明子は何処へ -』海竜社、昭和61年から。「平井幸策」(仮名)という少年名で、事件発生場所も変更して記述する。当該少年についての藤田の日誌は、現存し確認できる。

1994 (平成6) 62才

10月、大野町教育委員に任命される。

1996 (平成8) 64才

11月、立正大学経済学部で講演「もうひとつの少年期のその後の人生」。

1997 (平成9) 65才

11月、横浜知的障害関連施設協議会 (横浜市研修センター) で講演「施設の生活-もう1度教護をやりたい-」。

1998 (平成10) 66才

11月、卒業生を訪ねる。

1999年 (平成11) 67才

10月、北海道里親連合会 (洞爺温泉ホテル) で講演「少年達の群像 -北海道家庭学校の30年をふり返りつつ-」

2000 (平成12) 68才

1月、卒業生を訪ねる。

10月、大野町教育委員会教育委員長 (2004年10月まで)

12月、宮崎大学教育文化学部で講演「北海道家庭学校の教育について -自然・労働・人生の賛歌の回復-」。

2001 (平成13) 69才

12月、『まして人生が旅ならば -北海道家庭学校卒業生を訪ねて-』教育史料出版会、より刊行。

2002 (平成14) 70才

1月、大阪府立大学社会福祉学部で講演「息の長い仕事でありたい -北海道家庭学校の教育について (自然・労働・人生の賛歌の回復)-」。

7月三重県立国児学園で講演「息の長い仕事でありたい-大自然の中での人生の賛歌の回復 (北海道家庭学校の教育について) -」

11月、高知県立高知学園で講演「北海道家庭学校の30年をふり返りつつ非行とは何だったのかを問う」

11月、文京学院大学で講演「もう一つの少年期を生きる子どもたち」。

2003 (平成15) 71才

5月、大野町高齢者大学で講演「将来を語り合いながら厳しい対峙の30年 -ともに暮らした少年たちの日々と書き続けた日々-」。

2005 (平成17) 73才

8月、上磯町民生委員協議会第2ブロック講演会「特色ある少年達と交わって」

10月、**青少年自立援助ホーム「ふくろうの家」を運営する「青少年の自立を支える道南の会」の立ち上げにかかわり、初代表となる。**同ホーム同月開設 (函館市)。

11月、ルーテル市ヶ谷センターで開催された厚生労働省・東京都・全国児童自立支援施設協議会「児童自立支援事業105周年記念大会」で記念講演を行う。演題は「息の長い仕事でありたい -自然・労働・人生の賛歌の回復 (北海道家庭学校の教育について)-」。

2006 (平成18) 74才

1月、東京都立誠明学園で講演「北海道家庭学校で暮らした30年。そして今」。

2月、北斗市総合文化センター「かなでーる」で講演。

2月、北斗市誕生とともに、大野町教育委員会委員を辞す。

6月、「道南の会」NPO法人設立にむけた設立総会開催、会長に選出される。

7月、北斗市大野の自宅2階に保管した在職中日誌全部 (図6) を宮崎大学教育文化学部の河原に託し、送付する。「感無量。なんともいえない気持です」と記す (河原宛2006. 7. 30)。



図6 退職後、北斗市の自宅2階で保管された全日誌。

2007 (平成19) 75才

1月、「道南の会」はNPO法人として認可。同時に理事長に就任。

2008 (平成20) 76才

4月、「道南の会」名誉会長 (現在に至る)。

6月、児童家庭支援センター (千葉) で講演。

10月、母藤田ミツエが100才で死去。

2009 (平成21) 77才

5月、「79年の歳月を経て風雪に耐えるも老朽化」(「趣意書」)した祖父藤田市五郎の頌徳碑(「藤田翁称徳碑」の碑銘)を補修するという目的から千代田地区で寄付金募集が始まり、近親者として地区内の住民に協力を求める立場になる。ただし、藤田俊二自身は役員ではないこともあり、「頌徳碑補修工事発起人会」25名のなかに入っていない。

その趣意書に係わって藤田は記す。祖父母藤田市五郎から「逃れようと生き続けた部分が僕にはあり、それは今現在もあり、...個人としては尊敬しても大地主として大野に君臨していた『存在』そのものへの嫌悪感は昭和22年頃からそれは今も消えていません。...僕が太宰治や坂口安吾に引かれるのは、元地主の末裔たちの生き方のひとつのかたちとして見ている面もあり...」(河原宛、2009. 5. 23)

この月の末、『森崎和江コレクション -精神史の旅-』全5巻(藤原書店)を読み始める。

『産土』『地熱』『海峡』『漂白』『回帰』と5巻に分けての森崎和江の人生と仕事、筑豊の炭坑を自らの出発地として生まれ故郷の朝鮮半島と朝鮮半島の人たちとの共生を誠実な出発点とした僕よりも6才年上の人生の軌跡を追って見ようと思ったからでした。昭和36年夏から翌年秋まで歌志内の書店で予約購入を続けた『現代史資料』全巻、ゾルゲ事件、アイヌ、部落、兵

士、と切り口は多様ですが、あの時の緊張感に満ちた読書とこれから始まる森崎和江の軌跡を自分自身の人生と照合しながら生き続けようと真剣に思っています」と記す（河原宛書簡、2008. 5. 28受け）

6月、森崎の本に触れ、炭坑生活を回顧する。「時代も地底の条件も状況も違うのに、一字一句に地底で働いた者の知る急迫の真暗闇、いや真黒闇の労働の笑いや怒りがひしひしとつたわってくるこの仲間同士の感覚、...本当に炭坑で働いてよかったと今にして改めて思っています」（河原宛書簡、2009.6.8函館消印）

6月14日、俊二は祖父市五郎頌徳碑補修工事費用負担の件で藤田家本家によばれて、本家の藤田昌平（市五郎曾孫、61才）、藤田正裕（62才）、藤田一美（62才）とともに、話し合う機会を持ち、負担案について提案する。本家であり、現地区会長職にある昌平とともに、祖父の姿をはっきりと記憶する俊二も一定額を拠出するという提案で、三名も賛同する（河原宛書簡、2009.6.15）。祖父に対する個人的な思いは「封印」しての話し合いで、「血を受けている者として淡々と子孫であることの誠実な生を刻んで行くつもり」と藤田は記す（河原宛書簡、2009. 6. 17千代田消印）。

2010（平成22）78才

7月、函館少年刑務所にて私的な個別面接を務める（2011年11月まで）。

9月、図7。



図7 退職後、2010年9月、北斗市千代田の自宅で河原撮影。藤田夫妻が手にしているのは卒業生からの手紙。漁師として働いているこの卒業生は、収穫した魚をおりおりに届けてくれる。毎回、段ボールの紙片にマジックで挨拶文が記されている。

2011(平成23)79才

「他とかかわる部分がなくなった分だけ猛烈に本が読めるのです」と藤田は記す(河原宛書簡、2011.10.2函館消印)。「コレクション戦争と文学」全20巻、集英社をこの春予約する。

2012(平成24)80才

「印象深い少年がいれば、何名でもご教示」という筆者(河原)の問いかけ(藤田俊二宛河原書簡、2012.3.26)に対して、藤田は次のように書簡で記した。「長く暮らした少年、途中で姿を消した少年、苦勞した少年、全くすることのなかった何故家庭学校に来たか?今も首をかしげる少年も全部含めて、一人一人全部心に残り続けています。63才の最年長元少年、糖尿病の悪化で呻吟し続けている元少年、自分と同じ様に、息子を引き連れて放浪している元少年、会社を興して成功した元少年、息子が高校を卒業して警視庁と国鉄に合格した喜びのどんわをよこした元少年、泊原発の再稼働をただただ待っている元少年等々の140を超える元少年たちの自他から伝わってくる消息の数々は今の日本の切り口にもにてじんとし続けています」(河原宛書簡、2012.4.7函館消印)

表彰歴

- 1979(昭和54)8月、北海道社会福祉総連合会会長 児童福祉功労永年勤続
- 1981(昭和56)8月、北海道社会福祉総連合会会長創立30周年特別表彰
- 1983(昭和58)10月、北海道知事表彰 児童福祉功労・教護功労
- 1984(昭和59)7月、全国教護院協議会会長 教護功労・永年勤続
- 同年11月北海道民間社会福祉事業職員組合 社会福祉功労・永年勤続
- 1985(昭和60)10月厚生大臣表彰(児童福祉功労・教護功労)
- 1994(平成6)年、春、叙勲、勲六等瑞宝章(児童福祉功労・教護功労)
- 2005(平成17)11月、大野町特別功労者表彰(教育・文化)